

新しいお金の使い方

大阪府・聖母女学院中学校 3年 國枝 美希

「さあ、貯金箱あけるよ。」

と母の一声で私と父は居間に集まった。目の前にぶたさんの貯金箱が3つますます太って重そうに並んでいる。毎年恒例の母の誕生日のイベントである。

「今年はどれくらい入ってるかな。」

私はわくわくしながらその中のピンクのぶたの貯金箱のおなかのふたを開けてみる。

「やった、1万円はこえてる。」

「これで欲しかった本を買うぞ。」

と父はにこにこしながらいう。

「私は文房具。」

と言いながら、ロフトやキディランドを思い浮かべた。

「私は、前々から欲しかったカバン買おう。」

「えっ、またカバン。去年もカバンやん。」

「趣味、趣味。」

と母は言った。

母はもう何年も前から、3つの貯金箱を用意している。1つ目は自分のため、2つ目は家族のため、3つ目は社会のために使うお金を貯金している。時々、同じ金額をそれぞれ三つの貯金箱にいれている。そして、毎年誕生日にお金を引き出す。2つ目のピンクのぶたさんを私と父がもらえるのである。

「今年は、少しでも美希も社会のためにつかってみたら。」

と母は言いだした。

「えっ、どうやって。」

「私みたいに。」

と母は片方の目をつぶって見せた。確か、去年、母は、瀬戸内にオリーブの木を

植えようというオリーブ基金に賛同して3つ目の水色のぶたさん貯金箱を全部寄付していた。送られてくるオリーブ通信とやらを見せられた記憶があった。

「えっ、でも、文房具が。」

そこへ、本好きの父が、

「これ、読んでみなさい。おもしろいぞ。」

と『世界を変えるお金の使い方』¹⁾という本をぽんとテーブルの上に置いた。

「2人にしてやられた。」

と、父と母をきっとにらみながら、その本をしぶしぶ手に取ってみた。

「えっ、100円で内モンゴルの砂漠にポプラの苗木10本。」

思わず、声がでる。

ページをめくるごとに、どんどんと自分の知らない世界が目飛び込んでくる。たった100円でアフガニスタンの子供5人に国語と算数の教科書が提供できたり、日本の聴導犬の音の訓練1日分のごほうびがまかなえたりする。わずかなお金でかつ私にもだせるお金でできることが10個ほどもあった。ハイチュウ1個と同じ金額で、こんなにいろんなことができる。目からウロコというのはこういうことをいうのだろう。

「お母さん、お金っていろんな使い方があるよね。知らなかったわ。」

と尝试してみた。

「そうそう、美希みたいに、自分のためだけに使うのではなくてね。」

と母はにやっとした。

「ちょっと、社会に役立ててみようかな。」

「いいね、たとえば？」

「自然環境を守りたい。」

「へー、大きく出たね。でも、お金って、自分の意志を伝える道具でもあるのよ。」

と母は言った。

「ただ、自分のお金がどう使われていくのかを見守る必要はあるよ。やりっぱなしはいけないよ。最後まで見届けないとね。」

と少し、厳しい顔になった。

その本には、一人一人がアクションを起こす入り口となるような50の事例がのっている。100円からはじまって、300円、500円から、10万円まで個人でできる

ことが書かれてある。なかでも、野生のコウノトリの復活を目指すファンクラブや
鉏路^{くしろ}湿原の周辺の森林の買い取りや山梨^{やまなし}県の清里の森に住むニホンヤマネの
調査研究など、自然や環境に関する団体に、心ひかれるものがある。人間は、
自分一人で生きているわけではなく、自然に支えられ、他の人々と支えあって
生きている。だから、自然や環境の改善に積極的にお金を使いたいと思ったの
である。

生まれて14年、自分のためだけにお金を使ってきた。来年は高校生。そろそろ
社会に目を向けてもいい頃^{ころ}である。世界の動きに目を向け、何を選び、何に参加
するか、あるいは何を支えるかという新しい視点でのお金の使い方を学ぶ時期
であろう。早速、コウノトリファンクラブの申し込みをした。そして、母のように、
3つ貯金箱を買うことにした。

心なしかほっそりした3つのぶたの貯金箱が、にっこりとほほえんだように
見えた。

事務局注 1) 山本良一責任編集、Think the Earth プロジェクト編『世界を変えるお金の使い方』ダイヤモンド社、2004年

